

## 令和2年度第8回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和3年2月24日（火） 午前10時30分から12時00分まで
- 場 所： 市立病院北館7階ホール1
- 出席者： 理事長 黒田 啓史  
理 事 清水 恒広, 半場 江利子, 松本 重雄, 位高 光司, 能見 伸八郎,  
山本 みどり, 白須 正  
監 事 長谷川 佐喜男, 中島 俊則  
事務局 折戸経営企画局次長, 長谷川担当部長, 大島京北病院統括事務長,  
濱口経営企画課長

### 1 開会

### 2 議事・報告等

#### (1) 月次収支報告（12月分）

資料2に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 対前年度比較で見ると、経常損益の減少はそこまで大きくないように感じるがいかかがか。  
→ 新型コロナへの対応を行っている中で、例えば、疑い患者には結果が出るまで全て個室対応を行っており、経営上は厳しい運用を余儀なくされている。ただ、経常損益上は、稼働率を上げられない割にはがんばっている結果と評価している。
- 患者数自体は減っているが、新型コロナ対応に手を取られる中で、受入れを増やすことは可能なのか。  
→ 能力的には大丈夫と考えている。しかし、受入れの増加には患者を紹介いただくことが必要であり、そのためには前方連携が重要となってくる。
- 診療報酬単価を上げるため、どのような具体的な取組を行っているか。  
→ 外来で言えば、以前から症状の安定した患者は近所の診療所で受診し、高度な医療が必要になれば当院を紹介いただくという2人主治医制の取組を進めており、徐々に流れができてきている。外来対応に追われ、入院患者の増にまで手が回らず、超過勤務も多い状況にあった。外来、入院ともに人数を追うのではなく、高度な医療が必要な患者を紹介してもらえるよう、前方連携に力を注いでいきたい。

#### (2) 収入状況月次報告（1月分）

資料3に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 経常費用のうち、材料費が減少し、給与費が増加しているが、それぞれどのような理由によるものか。  
→ 材料費については、新型コロナによる患者数減に伴う減少である。給与費については、コロナ流行前に決定していた医師等の増員による体制強化に加え、昨年開設した緩和ケア病棟の人員も反映している。緩和ケア病棟は入院患者も徐々に増えているところであり、収入全体を上げる努力をしていく。
- コロナ禍で患者の動きが変わってきている中、診療報酬単価は好調で、救急受入件数や紹介・逆紹介率などの各種指標もいいところまで来ている。入院患者へのシフトや、外来患者は必要な方だけに絞るなど、改革のチャンスでもあると思うので、今のまま取組を進めて欲しい。

- 病院経営上のイメージ付けとして、コロナ収束後には、重症度の高い患者を中心に来ていただく契機となると感じた。
- コロナ収束後の受診状況の変容をチャンスと捉え、より重症度の高い患者の受入れに向けて、前方連携に取り組んでいく。
- コロナ禍で紹介率は下がると思っていたが上がっている。診療所からコロナ疑い患者の紹介があって上がっているのか。
- 当院では、コロナ疑い患者の、いわゆる発熱外来は行っていない。入院が必要な中等症以上の患者をしっかりと診るという当院の役割を果たしていく。

### (3) 令和2年度補正予算について

資料4に基づき、折戸経営企画局次長から説明  
議案のとおり承認された。

- 長期借入金は企業債を活用し、市からの借入れとなるのか。
- 今回の企業債は市が発行し、当機構に貸し付けるもので、銀行からの短期貸付と比較して低利で調達でき、15年という長期の借入れが可能となる利点がある。また、元本の支払いも2年間据え置かれる。

### (4) 令和3年度予算案骨子について

資料5に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 今回の予算骨子でキャッシュフローに支障は生じないか。
- キャッシュフローについては、新型コロナウイルスによる減収分は企業債で補てんでき、年度当初の若干の借入れで賄える予定のため、当面、問題はない。
- 京北病院の稼働率については現状を反映したものと思うが、低すぎる想定であり、これが続くようなら体制そのものを考え直さないといけない。
- 今回の稼働率の設定については、内部でも議論を重ねた結果である。現状を反映したものであるが、最低限クリアすべき基準として設定しており、来年度は上回る数値となるよう、実績を出していきたいと考えている。

## 3 閉会